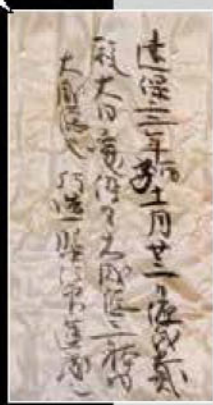
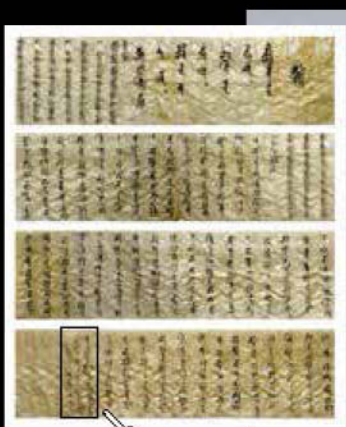




南アルプス市ゆかりの女性と

運慶作 大威徳明王像

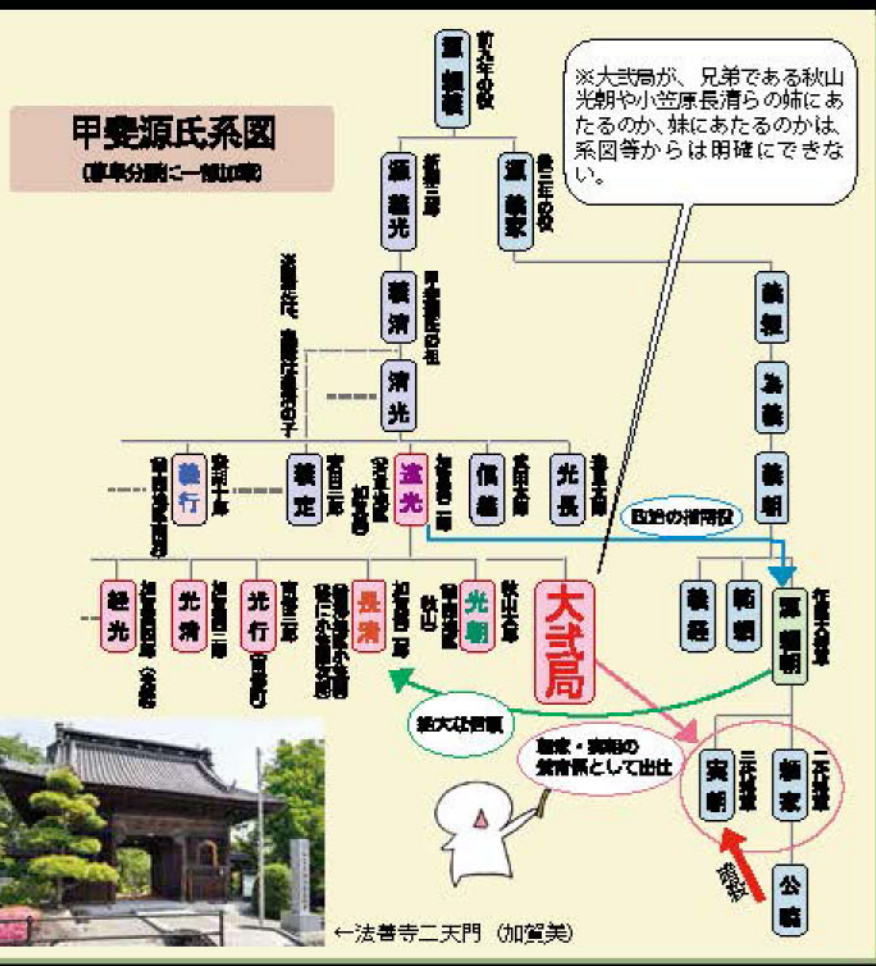


建保三年丙子十一月廿三日源氏大威徳大威徳也 巧造肥中法印運慶也

木造大威徳明王像運慶作/像内納入品 (新名寺光明院所蔵 神奈川県立全沢文庫保管)



法善寺全景 (加賀美) : 大武局は、ここにあった加賀美遠光の館で生まれ育った可能性が高い。



←法善寺二天門 (加賀美)

※大武局が、兄弟である秋山光朝や小笠原長清らの姉にあたるのか、妹にあたるのかは、系図等からは明確にできない。

像内に納入された文書から、本像が建保四年(一一三二)に源氏大威徳の美像により、大日如来、源明王、大威徳明王の三尊像の内のひとつとして、仏師運慶によりつくられたことが明らかになった。

時のカリスママ仏師運慶に、仏像の制作を依頼することができたほどの力を持った大武局とはどのような女性だったのでしょうか。

大武局は、文治四年(一一八八)に鎌倉に出仕し、源頼朝からその名「大武局」を与えられ、鎌倉幕府の二代将軍頼家、次いで三代将軍実朝の介錯人(養育係)となった女性です。頼朝の信頼も厚く、幕府後宮では、頼家の乳母で北条政子の妹であった阿波局に次ぐ地位で、実朝の養育係に転じ阿波局なき後は、実朝付の筆頭格の女房として後宮を取り仕切ったといわれています。建暦三年(一一三三)に起きた幕府の内乱である和田義盛の乱の際には、女性としては異例のことですが、戦功のあった御家人に並び、出羽国由利郡(現在の秋田県南部)に領地も賜っています。

大武局が運慶に造仏を依頼した建保四年

今回ご紹介する大威徳明王像は、像高一二・一センチの小さな像です。横浜市にある名刹、新名寺の子院の光明院に所蔵されてきましたが、平成十九年の養修復のために解体したところ、像内に納められていた文書から、建保四年(一一三二)に運慶が「源氏大威徳」の依頼で作ったことが明らかになり、約五十年ぶりの運慶の真作発見として、全国的にも大きく報道されました。

東大寺の仁王像などで知られる運慶は、平安時代末から鎌倉時代にかけて活躍した、我が国で最も有名な仏師(仏像を彫る彫刻家)といっても過言ではありません。それは現存する運慶の作品、またはその作と推定されるものすべてが、国宝か国の重要文化財に指定されていることから明らかです。本像もこの発見の後、平成二十年に国の重要文化財に指定されています。そして、その手が生み出した写実的で力強い造形は、現代においても数多くのファンを獲得しています。

ところで、この運慶に仏像の制作を依頼した「源氏大威徳」こそ、現在の若草地区加賀美にある法善寺の場所に館を構えていた、甲斐源氏加賀美遠光の娘「大武局」である可能性が極めて高いといわれています。小笠原長清や秋山光朝、南部光行らとは兄弟ということになります。

年は、三代将軍実朝と幕府家臣団との軋轢が深まっていた時期といわれ、三年後の建保七年(一一二九)には、頼家の子、公暁によって、鶴岡八幡宮の石段で実朝が暗殺される事件も起きています。造仏の背景には、自らが深く関わった人々を取り巻く、このような不安定な状況を憂う大武局の想いがあったとの指摘もあります。小さな仏像の発見を通じ、南アルプス市と、鎌倉の歴史舞台に関わった人々との意外なつながりを知ることができます。

また、幕府の中枢にあって運慶に造仏を依頼した大武局を通じ、仏師運慶と鎌倉幕府との緊密な関係が明らかになるとともに、加賀美遠光をはじめとする南アルプス市域に拠った甲斐源氏たちが、幕府内に築いた、確固たる基盤も確認することができるとのことです。

文：文化財課